

小澤紀美子さん

(東海大学教養学部教授)

「環境教育」で何が変えられるか

美しい地球を次世代に残すために、私たちは何をすればいいのか？ 環境庁中央環境審議会委員長などを歴任し、二〇〇四年には環境教育推進法の基本方針をまとめるなど、長年、環境教育の研究と実践に携わってきた日本環境教育学会・前会長の小澤さんに、現状と課題を聞いた。

環境教育を考えることで日本の教育を問い直す

地球温暖化問題を筆頭に、二十一世紀に入ってから環境への関心が世界的に高まってきています。そのなかで、環境教育に対する注目度も増しているように感じられます。

確かに環境教育への関心は高まっていますが、その本質をすべての人が理解しているかというと、残念ながらそうではないと思います。環境教育とは、ただ単に環境問題を教えることではないからです。

「温暖化が進んでいる」「砂漠化が広がっている」「土壌汚染がある」という事実だけを伝え、「環境保全のための行動を起こしましょう」と啓蒙するだけに留まらず、なぜそれが問題なのかという根本的な問いに向き合い、環境問題を引き起こす背景や、その起因するところの諸要素の相互関連の知識を獲得する必要があります。

そして、その問題が起こる背景を理解した上で具体的な解決に向けた行動を起こさなければ、真の意味での環境教育とはいえないと私は考えています。

「環境教育」という言葉は、一九四八年に国際自然保

護連合（IUCN）の総会で「生態系にかかわる教育」という意味で世界の表舞台に登場したのが始まりです。日本では高度経済成長がもたらした公害問題に端を発し、六〇年代後半から公害教育として実施されてきました。

学校教育においては七〇年代後半の学習指導要領改訂で環境教育が重視され始め、以降、自然保護活動



●こざわ・きみこ 北海道生まれ。工学博士。北海道大学、東京大学大学院で建築学を学んだ後、民間の研究所でシステム開発に従事。以降、システム論的な視点から「子どもの居場所づくり」「持続可能な社会をめざす環境教育」などをテーマに研究と実践を進めている。現在、東海大学教養学部人間環境学科教授、東京学芸大学名誉教授、NPO法人こども環境活動支援協会代表理事。著書に『まちは子どものワンダーランド——これからの環境学習』（風土社）など多数。

野外教育、公害教育、環境科学教育として行なわれてきました。九〇年代に入るとグローバル規模での地球環境問題がクローズアップされるようになり、学校教育だけでなく行政や地域における取り組みも活発化してきました。

しかし残念ながら現代の日本では「温暖化だからエネルギーを無駄に使わない」というスローガンのもと、照明をこまめに消す、節水を心がけるといった直接的行動を起こしたとしても、その本質はあまり理解されていません。もちろん、環境に対する意識を深めるためにも、水や電気の節約に取り組むことは大切です。ですが、電気をこまめに消すだけで行動を起こした気になるようでは困ってしまいます。

目に見えない課題に取り組む能力の育成と、実際に行動に移す力、さらに社会システムの改善を求めるような思考力と実践力を持つ人材の育成が、これまでに以上に求められているのです。

残念ながら環境教育に関するこのような問題意識を、すべての人が持っているわけではありません。それなら意識のある人だけが課題に取り組めばいいのか？ それも違いますよね。